

「知識の伝達—貯蔵モデル」への過剰適応と理性的能力形成の問題 —高校の「進学“面倒見”競争」が大学教育にもたらす影響—

筒井美紀（京都女子大学）

1. 問題の所在と本報告の目的

大学受験を控えた高校 3 年生に人気の高い教師とは「このチャート／公式を覚えれば大丈夫」式の受験指導をバッチリしてくれる教師のようだ。こうした「暗記パッケージ」の選好つまり「知識の伝達—貯蔵モデル」への過剰適応は、自力でグラフや表を読み解く—分析や論証—といった、大学で要求される「理性的能力」の形成に、どのような影響を及ぼしているのか。本報告は、報告者が担当する入門科目「社会学アプローチ」の期末試験の得点と、解答用紙に付加したミニ・質問紙とを関連づけて分析し、これを明らかにする。

この解明が重要なのは、大学と高校の各段階で形成される能力の間の、質的ギャップを拡大する社会的な流れが存在するからである。

朝日新聞実施の「2007 年春 主要 100 社採用計画調査」によれば、新規大卒採用で重視する点は「コミュニケーション能力」「行動力」「熱意」が選択式回答の上位 3 つだったことに加えて、自由回答では論理的思考力・文章力を重視する企業が目立った。こうした結果は、レトリックあるいはイデオロギーの要素も少なくなかろう。だが、その多寡に拘らず大学教育は、グローバル化や知識資本主義化を背景に競争が激化した大卒労働市場を意識して、その形成に注力せざるを得ない。

他方で少子化は、高等学校の生徒獲得競争を激化させ、大学進学実績の上昇に血道をあげさせる。そのため、進学先別クラス編成の早期化のみならず、「暗記パッケージ」を明確に提示する受験指導が切望されることになる。これは「進学“面倒見”競争の激化」と呼ぶのが相応しかろう。

以上の理由から、理性的能力の形成面における高校と大学の接続は非常に重要な課題である。それゆえ本報告は、これを実証的に解明していく。

2. データと試験問題の内容

前述のように本報告は、報告者が担当する入門科目「社会学アプローチ」の期末筆記試験の得点と、それに付加したミニ・質問紙との関係を分析する。まず、試験問題について述べると（問題のコピーは当日配布）、大問が 3 題、全てグラフの

解説に基づく論述である。しかも講義では、これら 3 つのグラフに全くふれていない。学生は初めて見るのであり、暗記したことの吐き出しでは対応できない。すなわち、この試験で求められたのは、講義で学んだ社会学的視点・概念を用いつつ、初めて見るグラフを自力で読み解く—分析や論証—という理性的能力の発揮なのである。

解答用紙に付随させたミニ質問紙では、レジュメやノート、教科書の指定箇所の読み直し（復習）の状況、授業参加のあり方、大学受験の勉強の仕方などを質問した。なお、履修登録者は 253 人、期末試験受験者は 215 人であった。

3. 分 析

3-1. 得点結果の記述統計量

90 点満点の試験で、平均点は 60.1、最小 12、最大 90、標準偏差 14.28 となった。問題ごとの結果は、図表 1 のとおりである。

図表 1 得点結果の記述統計量

	最小値	最大値	平均値	標準偏差	変動係数
合計得点	12	90	60.10	14.28	0.24
大問 1(1)	0	10	7.95	1.91	0.24
大問 1(2)	0	20	13.38	5.35	0.40
大問 2	0	30	14.00	9.35	0.67
大問 3	0	30	24.77	5.88	0.24

各問題の変動係数を見ると、大問 1(2)が 0.40、大問 2 が 0.67 と、大問 1(1)と大問 3 に比べて、大きな値となっている。これは、大問 1(1)が棒グラフの記述、大問 3 が「常識問題」にかなり近い問題であることに対して、大問 1(2)が「ジェンダー」「イデオロギー」概念を、大問 2 が「高学歴代替」概念を、それぞれ理解した上でのグラフの解説を要求しているためだ、と考えられる。

3-2. 何が得点を左右するか—分散分析—

では、何が得点を左右するのか。それはやはり、どれだけ勉強したかであろう。図表 2 と図表 3 に示したように、レジュメやノート、教科書の指定箇所を読み直した量が多いほど、平均点が高くなっている。とりわけ、「7 割以上再読」とそれ以外では、大きな差が認められる。

図表2 レジューメやノートの再読程度と合計得点の関係

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差
殆ど読まず	16	54.88	12.53	3.13
3-4割程度	25	53.72	16.77	3.35
半分程度	50	57.32	15.56	2.20
7割以上	124	63.19	12.64	1.14
合計	215	60.10	14.28	0.97

有意確率=.002

図表3 教科書の指定箇所の再読程度と合計得点の関係

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差
殆ど読まず	37	58.51	17.59	2.89
3-4割程度	38	56.55	15.89	2.58
半分程度	54	57.93	13.38	1.82
7割以上	85	63.81	11.79	1.28
合計	214	60.12	14.31	0.98

有意確率=.020

以上は「学問に王道無し」を再確認した結果となった。より興味深いのは「講義中に教科書や論文を（独りで）読むよりも、板書をノートしている方が、自分にはしっくりする」かどうかで、平均点が変わってくることだ。「講義中に教科書や論文を（独りで）読む」というのは、グラフを作成・記述し、そこから因果仮説を考えるエクササイズの後、それに対応する箇所を自力で読み考えるという作業を行わせた、という意味である。図表4からは「板書をノートしている方がしっくりする」ほど、得点が低くなっていることがわかる。

図表4 「講義中に教科書や論文を読むよりも板書をノートしている方が自分にはしっくりする」と合計得点の関係

	度数	平均値	標準偏差	標準誤差
当てはまらない	87	62.89	12.90	1.38
どちらでもない	52	58.94	17.09	2.37
当てはまる	76	57.71	13.29	1.52
合計	215	60.10	14.28	0.97

有意確率=.055

3-3.「知識の伝達—貯蔵モデル」への過剰適応と理性的能力の形成・得点結果の3者関係

教科書や論文を（独りで）読むより板書をノートしている方がしっくりする——この構えは、既に高校時代につくられているに違いない。そこで、これを「『この図表／公式を覚えれば大丈夫』という形で重要箇所を明示してくれる受験指導が大好きだった」とクロスさせると（図表5：当日）、大好きだったほど「板書をノートしている方がしっくりする」ことがわかる（Somers'd=.197）。

以上から見えてくるのは「①これを覚えれば大丈夫式受験指導が大好き→②自力で読むよりも板書をノートする方がしっくり→③得点が低い」という流れである。①②は各々「当てはまる」「どちらでもない」「当てはまらない」の3つのカテゴ

リーがあるので、 $3 \times 3 = 9$ グループを作り、平均点を比較できる。これを示したのが図表6である。

図表6「これを覚えれば大丈夫式受験指導が大好きだった」×「教科書や論文を読むよりも板書をノートしている方がしっくり」で見た平均点の比較

大好きだった	板書しっくり	平均値	度数	標準偏差
当てはまらない	当てはまらない	65.6	36	12.7
	どちらでもない	58.0	16	14.4
	当てはまる	59.7	15	11.8
	合計	62.5	67	13.2
どちらでもない	当てはまらない	59.9	20	12.2
	どちらでもない	66.1	9	17.2
	当てはまる	60.0	20	10.3
	合計	61.0	49	12.5
当てはまる	当てはまらない	61.6	31	13.3
	どちらでもない	57.1	27	18.4
	当てはまる	55.9	41	15.0
	合計	58.0	99	15.6
合計	当てはまらない	62.9	87	12.9
	どちらでもない	58.9	52	17.1
	当てはまる	57.7	76	13.3
	合計	60.1	215	14.3

* 第1層（「大好きだった」）の分散分析：有意確率=.123

表中の斜字体に注目されたい。「これを覚えれば大丈夫式受験指導が大好きだったわけでもなく、板書のノートの方がしっくりするわけでもない」学生の平均点は 65.6 点、「これを覚えれば大丈夫式受験指導が大好きで、板書のノートの方がしっくりする」学生の平均点は 55.9 点と、ほぼ 10 点の差がある。もちろん、第1層の分散分析は有意確率=.123 となっている。だが、この差を無視するべきではなかろう。しかも後者は 41 人と、受験者の約 2 割に達する。未受験者 43 人の大半も、このタイプであろうことは想像に難くない。

4. 結 論

高校時代の「知識の伝達—貯蔵モデル」への過剰適応は、大学で要求される分析や論証といった理性的能力の形成にマイナスである——以上の分析は、これを実証した。この問題は経済競争の激化に加え、少子化の進行過程でさらに拡大するだろう。先日、某高校の先生が「私学の授業料に見合うサービスを私たちは日々提供しているが、「やりすぎとちがうか?!」という日々の私の思いを「進学“面倒見”競争」という言葉に我が意を得た」と言われた。また別の高校の先生は「高校の仕事はとにかく生徒を大学に入れることで、そこから先は大学が何とかしてくれると思ってきた」と言われた。高校と大学の接続の、理性的能力の形成面における矛盾の拡大に歯止めをかけることの困難さが、非常に懸念されるのである。